

## あとがき

人間の社会生活の規模が大きくなるほど、移動手段としての交通機関の必要性も高まってくるといえるだろう。全世界にわたる人と物の移動が大量かつ迅速に行われるようになった現代では、それまで太古さながらに「交通機関としては彼ら自身の脚があるばかり」（塩田）だったニューギニア高地人の世界にまで飛行機を先頭に最新文明の交通手段が一挙に侵入してしまった。車輪のついた車を知らなかったアフリカの部族社会にも植民地化とともに鉄道が敷設され、人々の生活に大きな変化をもたらされた（アフリカ各編）。一方、最近のベルリンの壁の崩壊からは、いかに交通手段が便利になろうとも、人々の往き来を阻むものは国際政治の人為の壁であったことも改めて認識させられた。「交通」という窓を通じて見る世界には、興味尽きないものがある。

本書を編んだ意図については、吉田によるはしがきでも述べているが、第三世界の各国・地域において人々の暮らしの足であり、経済の動脈の役割をも果たしている多様な交通機関の存在形態を読者に紹介し、その将来についても考えようとするものである。執筆者は、それぞれ豊

富な現地体験をもつ地域研究者であり、その視野は交通機関をめぐることがらを通じて対象国・地域の歴史、社会のありかたの問題にまでわたっているものが多い。

なおこの書は、「アジアを見る眼」シリーズのなかの先行する「くらし」系列、すなわち「はかり」「こよみ」「すまい」の三冊と同様に、『アジ研ニュース』第九十八号（一九八九年一・二月合併号）の「第三世界の交通機関」特集に集まった三〇編に源を発し、それらに加筆改稿のうえ、新たに書き下ろされた五編を加えて成立したものである。新規執筆分は次のとおり。中国・内田、フィリピン・藤森、インドネシア・佐藤、インド・多田、補章・大岩川。

最後に、『アジ研ニュース』発行の際に関心を寄せてくださった各方面の好意ある励ましおよび本書の制作に携わった担当者の方々に感謝したい。そして、この小冊がさきの三冊に続いて第三世界の人々の「くらし」を語るものとしてひろく読者を得ることを念願している。

一九九〇年二月

吉田 昌夫  
大岩川 嫩

アジアを見る眼

アジアのエネルギー 林 雄二郎著

アジア諸国の経済開発とエネルギー開発の関連を、人間のためのエネルギーという視点で書かれた初めてのアジア・エネルギー論。

モンスーンアジアその自然と人間 別枝 篤彦著

世界人口の過半数が集中居住し、今なお動乱するモンスーンアジア。そこに生きる人々の発展の歴史をふり返り、今後の発展の可能性を探る。

東南アジアの水 家永 泰光著

東南アジア諸国の農業技術の発展上、重要なカギを握っている「水」の問題を初めて専門的に扱いアジアの総合的な理解に資する。

東南アジアのこころ 民族の生活と意見 岩田 慶治著

著者自ら東北タイ南部のクメール族村落ブルアン村に入り農民とともに生活し、村人の生活の現状と生活観、未来観の意識についての調査研究。

ラッフルズ その栄光と苦悩

M・コリス著 根岸富二郎訳  
シンガポール建設者として、同時に東洋学者、動物収集家としてアジアに不朽の名を残したスタンフォード・ラッフルズの栄光と苦悩の生涯。

経済統合理論の系譜

片野 彦二編  
国際経済学を共に専攻する執筆陣が、共同研究の過程で、検討・整理した経済統合理論発展の系譜。巻末に一三〇点の参考文献を付す。

東南アジアの華僑 游 仲 勲著

世界にひろがる一六〇〇万華僑の政治・経済に及ぼす影響は大きい。華僑とは何か——その驚異的な発展の論理を解明する。

印・パ分離への道

A・テイ著 宏訳  
あるイスラム思想家の悲劇 佐藤 宏訳  
今なお分離独立の傷あとに悩み、血で血を洗う宗派対立から脱出しきれぬ両国の誕生のかけに埋もれた民族統一への必死の試みに新たな光を当てる。

アジアを見る眼

経済成長モデルと経済発展

方法論的反省の試み

飯田 経夫著

「経済成長理論」と「経済発展理論」の不幸な分  
裂の原因を探り、解消の手掛りをもとめた大胆な  
試論。

中東の窓——レバノン

小山 茂樹著

「中東の窓」として国際的役割を担うレバノンの  
状況を、経済活動の面にスポットをあて、著者が  
現地で集めた最新のデータを使ってあらい出す。

中東 雑記

林 武著

著者の現地生活を基盤に、日本人には把握しがた  
いと思われている中東の政治、風俗、生活、宗教  
を具体的に、読み物ふうにして語って飽きさせない。

中国現代史の周辺

小林 文男著

日本統治下の台湾の抗日運動、毛沢東の階級概念、  
蒋介石と三民主義など、現代中国を理解するうえ  
で重要な問題を掘りおこした論集。

アフガニスタンとイラン

人とこころ

津田元一郎著

古来、東洋と西洋とを結ぶ要路にあり、現在、国  
際紛争の焦点に立つ両国の国民性、価値観、行動  
のパターン等を著者の現地体験をふまえて解明。

ASEANと日本経済

片野 彦二著

ASEAN地域の経済開発が、世界経済、そして  
特に日本の経済にとって、いかなる意味と影響を  
もつものなのかを考える。

アジア人口学入門

上田 耕三・  
小林 和正・  
大友 篤著

人口学の基礎的方法とそれに関連する知識を紹介  
し、併せて一九七〇年前後のアジア諸国の人口の  
規模、構造、動態、家族計画等を概観。

アジアの教育

豊田 俊雄著

アフガニスタン、イラン、以東のユネスコ加盟17  
カ国をとりあげ、「アジアの社会経済発展と教育」  
の角度から、根の深い「教育」の現状と問題を探る。

現代エジプト論

中岡 三益著

アラブ社会主義の旗手として注目を集めたエジプトが挫折をへて、転換した過程の考察を軸に、国際社会の中で模索する中東諸国の姿を分析する。

インダス河の開発

パキスタンの水と農業

小林 英治著

パキスタンの人々にとって生命の河ともいふべきインダス河の一大水利事業の歩みをふりかえり、合わせて農業、エネルギー開発の現状を分析する。

公開發展途上国の財閥

伊藤 正二編

民族系私企業の発展が比較的すすんだ国である韓国、フィリピン、タイ、インド、ブラジルを対象に、その実態に迫る。

アジア諸国のエネルギー問題

富舘孝夫・原嘉夫・早川光彦・矢野裕子著

日本にとって重要な東南アジアのエネルギー事情の特徴と問題点を整理し、現状と将来の展望を多角的に、かつ平明に解説する。

東南アジアの石油産業

現状と将来

神原達・斉藤隆・畑山茂著

東南アジアの主要産油・消費地域にかんして、自然条件・経済的問題の両側面から、最新の情報・データをとり入れて石油需給予測をまとめる。

パプアニューギニアの社会と経済

谷内 達著

村落調査の成果やオーストラリアの専門家との交流などの経験を基礎に、図版や統計資料を豊富に用いながら現状を解剖する。

第三世界の人口移動と都市化

柴田 徳衛・加納 弘勝編

人口爆発が第三世界の都市に巨大なスラムやスクウォッターを形成している。この深刻な都市問題を多様性の中に位置づけて、解決の方向を探る。

公開發展途上国の財閥

伊藤 正二編

民族系私企業の発展が比較的すすんだ国である韓国、フィリピン、タイ、インド、ブラジルを対象に、その実態に迫る。

アジアを見る眼

開 発 経 済 学 文 献 と 解 題

渡辺 利夫・ 開発途上国における開発課題のあり方と変遷について概論的な展開を試み、後段の文献解題では、できるだけ新しい文献を取り上げた。

公 開 講 座 第 三 世 界 の 食 糧 問 題

長谷山崇彦・ 21世紀に向けてますます深刻さを加えている途上国の食糧問題の実態を分析し、水産資源の開発問題、農業技術問題も併せて解説、将来を展望する。

地 域 経 済 の 国 際 化

山崎 充・ 中小企業がかかえる海外投資の問題を扱い、地域産業の特徴、国際化の現状と見通し、さらに地域特性のある業種から選んだ海外投資事例で構成。

中 東 の 開 発 と 統 合

宮治 一雄編 70年代の経済開発政策の現在への影響を政治統合と社会統合の視点から具体的な事例により検討し、その将来を展望する。

ア ビ ジ ャ ン 日 誌

原口 武彦著 西アフリカの近代的都市アビジャン滞在中に見聞した庶民の生活ぶりを、ユーモアあふれるタッチでつづるアフリカ報告。

メ キ シ コ の 教 育 発 展

米村 明夫著 メキシコの教育発展の社会学・経済学的分析を通じて、途上国の社会経済発展における教育の役割への多面的接近を試みる。

「は かり」と「く ら し」

小島 麗逸・ 途上国のくらしに根ざした度量衡の実態を、30数名の地域研究者が体験的に論じ、解明。第三世界の地域理解に必須の手引。

発 展 途 上 国 の 企 業 経 営

米川 伸一・ 欧米の経営ノウハウ枠組が土着の経営風土に移転、担い手と戦略の変遷 小池 賢治編 転型されてどう消長したか。マルコス期のクローニ、香港のJ M商会等、各国事例を具体的に検討。

アジアを見る眼

「こよみ」と「くらし」

第三世界の労働リズム

小島 麗逸・大岩川 敏編

途上三十数カ国の多様な生活リズムを、地域研究者の眼で「暦」の世界に探る。巧まざる文明批評。

第三世界の教育

豊田 俊雄著

途上国教育を、文化的・宗教的伝統を背景に、六地域に分けて考察。第三世界の教育に、原点をみる。

ラテンアメリカ経済の危機

新しいハラタイムへの模索

ECILAC編 小坂・細野・加賀美 出。

対外累積債務等の経済危機に瀕する中南米で、国連の地域事務局が総力をあげてその長期戦略を案出。

第三世界の農業政策

保護と財政

小倉武一監修 小島 麗逸編

財政赤字、ひいては累積債務問題と農業・食糧政策とが切り離しえない深い関わりをもっていることと、各国の実態報告で明らかにする。

アセアンの経済計画

歴史的課題と展望

井草 邦雄編

国づくりのシナリオともいいうべき経済計画を歴史的にたどり、近代的経済構造へ転換しつつある現在と将来の発展を考察する。

「すまい」と「くらし」

第三世界の住居問題

堀井 健三編 大岩川 敏編

「国際居住年」から二年を経て、第三世界の住居問題はますます深刻。都市のスラムに、農村の集落に、その多様な実態を浮き彫りにする三十数編。

中 東 国境を越える経済

宮治 一雄編

中東主要国・地域の最近の動向の中からレバノン内線、イスラム金融、出稼き問題等、八つの代表的問題を選び、中東安定化の基本的な方向を探る。

「のりもの」と「くらし」

第三世界の交通機関

吉田 昌夫編 大岩川 敏編

ベチャから飛行機まで――途上国の人々の暮らしの足として、経済活動の動脈として活躍する多様な交通機関のあり方を興趣豊かに解説する三五編。

地中海から太平洋まで、この広くアジアと呼ばれる地帯には幾十かの国がある。その大部分は第二次世界大戦以後、古い植民地体制から脱して新興の独立国となったものである。世界の人口の半ば以上のものがここに存在する。これらの新興国はそれぞれの立場に立って、建国創業の仕事に力をつくしている。

その業は果たして障害なく着々と進んでおるか。だれもがこれに対して頭をかき上げるであろう。そしてだれもがアジアは「流動的」であるという。

流動的とは何であるか。また何でないか。いくたの混みいった事態のなかを、一本の金の線が生々発展的に縫っているのも流動的である。経済は着々と成長し、政治は一つの体制のなかで徐々に整備されているような場合がそれである。

アジア諸国の大部分については、事態はこのように簡単ではない。もちろん、経済の場面には大きな発展・成長の芽生えはある。しかし、他面においてそれを抑制するものが力づよい。またおよそ発展や成長を考える場合、在来流行の理解によるパターンを以ってするのが果たして正しいか、との疑問もでてくる。さらに政治体制については、イデオロギーの対立、複合民族国家における特殊なナショナリズムに伴う民族や種族間の闘争があつて、政治的安定はなかなか期すべくもない。独立国家の幼年期に伴う政治的、行政的未熟もまた考えられるべき大きな原因である。

こういう次第で、アジアが流動的であるとは、一つの混沌を意味するものといえようか。そしてその上に立っていかなる経済・社会・政治の体制が整いだされるであろうか。——この意味で二〇世紀後半のアジアは世界における「問題」、いな最も大きな「問題」である。

アジア経済研究所は、まさにこの「問題」の理解に向かつて、ひたすら前進をつづけている。われわれの期するところは、まさにそれぞれの国の現実に即した精確な知識を供しよう、そしてこの大きな「問題」について静かなサービスをいたそうとするに尽きる。設立以来すでに七カ年余り、専らそういう道を歩んできたし、今後もそれに変わりはない。このシリーズは、多くの研究や調査の報告書、現地調査を土台として、アジアについての解説書・教養書たることを目標とするものである。

一九六六年三月

アジア経済研究所 東 畑 精 一